

視覚障害者用アプリ実験

点字ルート 音声などで誘導

崇城大（熊本市）の工学部建築学科の学生らが、AR（拡張現実）を使ってスマートフォン上で点字ブロックのようなルートを表示させ、音声で歩行を支援するアプリ「AR点字ブロックナビ」の開発に取り組んでいる。視覚障害者が安心して出かけられる街にしようとして、ブロックがない市街地で実験を行った。今後、検証結果を踏まえてアプリを改善し、実用化を目指す。（内村大作）

崇城大生ら開発取り組む

「振動で安全に進める方向がわかり、歩きやすい」。熊本市中央区の下通アーケードで25日にあった「福祉のまちづくりワークショップ」。アプリを実際に使って道案内を受けた市視覚障がい者福祉協会の天川浩彦会長（57）は、感想を語った。

アプリは、自動運転などに使われる空間認識の技術を活用。通りの建物や看板は、あらかじめ3次元（3D）でスキャンしてあり、アプリのカメラを使って実際の空間と結びつける。アプリ上にルートが表示され、「直進」などの音声や振動で目的地に誘導し、ル

ートを外れると警告する。天川会長は左手にスマホ、右手に白杖を持ち、学生たちと街を歩いた。「学生が頑張ってくれているのがうれしい。街に出やすくなる。色んな場所に応用できたらいい」と期待する。学生は古賀元也准教授の研究室に所属。市が6月に策定した「バリアフリーマスタープラン」の実施計画の立案に関わっている。市中心部の下通や上通、新市街には点字ブロックがないため、IT（情報技術）を活用して環境整備をすることにした。

研究室では昨年度、鉄道駅ホームの転落防止用のアプリ開発にも取り組んでおり、共同研究するエンジニアの協力を得て技術を応用した。今回の取り組みを研究テーマにしている崇城大4年の藤原拓巳さん（21）は、「人通りが多く、通行人の検知などの機能も必要だ。ツールの一つとして活用してもらえようになりたい」と意欲を見せた。

プランを担当する市移動円滑推進課は、「点字ブロックの設置が難しい場所もある。ハード整備だけでなく、ITも活用して移動しやすい環境づくりにつながりたい」としている。



点字のルートが表示されたアプリの画面（古賀研究室提供）